

学生と図書館の協働の可能性

－お茶の水女子大学 LiSA プログラムについて－

廣 田 未 来, 茂出木 理 子

抄録：お茶の水女子大学附属図書館では「図書館サービスと業務運営のイノベーション」の創出を念頭におき、学生と図書館職員の協働による図書館活性化のための活動「LiSA（リサ）：Library Student Assistant プログラム」を2007年11月にスタートした。学生の学習・教育支援を目的として導入したLiSAプログラムは、学生に対し、幅広い資料に接することによる「学習支援」や就業体験による「キャリア形成支援」という効果をもたらすとともに、図書館にとっても心強いサポーターとして大切な存在となっている。このLiSAプログラムの取組みについて具体的なエピソードを交えて報告する。

キーワード：お茶の水女子大学、学習・教育支援サービス、学生協働、図書館活性化、キャリア形成支援、Library Student Assistant (LiSA)、図書館サポーター

1. はじめに

昨今、大学図書館の果たすべき機能として、学習・教育支援、とりわけ教育プログラムとの連動が重視されている。

お茶の水女子大学では、21世紀に幅広い分野でグローバルに活躍できる女性の人材育成をめざし「女性リーダーの育成」「キャリアサポート」「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」などに取り組んでいる。附属図書館では、これらの全学的な教育改革の動きに前後し、2006年の春から秋にかけて「リベラルアーツ支援図書館」をキーワードとした附属図書館の将来像の検討を行い、図書館改革に着手した。

検討の基本として念頭においたことは、「図書館サービスと業務運営のイノベーション」ということである。イノベーションという概念は、狭義では「技術革新」と訳されるが、2009年8月18日の『日本経済新聞』の「経済教室」欄¹⁾で東京大学の堀井英之教授が解説されているように、本来の意味は「生活者が潜在的に求めていることを感知し、それを実現できるモノやサービスを提供できるようにすること。そして、そのことにより人々のライフスタイルや価値観の変化を誘導するもの。」である。また、同記事の中で堀井教授が指摘するように、イノベーションの成功の秘訣はホットなチーム作り、迅速なプロトタイプ制作、楽しい経験の提供などイノベーションが産み出されやすい職場環境であるが、その一方、職場には、前例踏襲の慣習や新しいことにチャレンジすることへの不安感など、イノベーションの芽を摘み取る要素も存在する。

我々が図書館サービスや業務運営のイノベーションでもっとも重要だと考えたのは、図書館がどういう機能やサービスを提供したいかではなく、利用者

が本当に求めていることは何かという「利用者本位のイノベーション」の考え方である。つまり、サービスの対象である利用者の立場にたって、学生のために図書館はこれからさらに何を提供することができるかということを徹底的に考え、できることを次々と迅速に実施すること。そして同時に、新しい仕事に楽しく取り組み、短期間に成果を出せる職場のメカニズムを整えることを重視した。図式化すると以下ようになる。

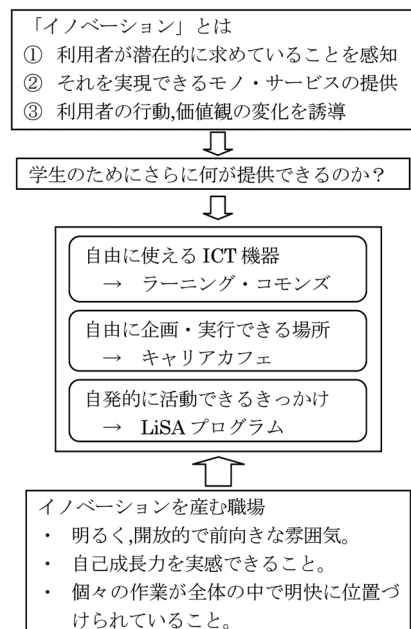


図1 図書館サービス、業務運営のイノベーション

以上のように「イノベーション」を念頭においた検討を基に、本学図書館で具体的に実施してきたことは、大きく分けると3点である。1点目は、資料提供に関する直接的な改善である。学生のILL料金の無料化、学生用図書の実充を目的とした職員に

よる選書を開始した。2点目は、快適な学習空間を提供することである。ラーニングコモンズやキャリアカフェの設置のほか、ラウンジのリニューアル、館内の掲示・展示なども細かく改善してきた。(これらの取り組みについては既に本誌 83 号(2008 年 8 月)で報告させていただいた。ご参照いただきたい。²⁾) 3点目は、学生と図書館職員の協働による図書館活性化のための活動である。全学的な教育改革の動きの一環として図書館が立案して承認され、2007 年 11 月に「LiSA (リサ): Library Student Assistant プログラム」をスタートさせた。本稿では、LiSA の導入の目的と具体的な実施内容、その効果について報告する。

2. 概要

2.1 LiSA プログラムとは

この LiSA プログラムを導入した第一の目的は、学生の学習・教育支援である。このプログラムに参加する学生が幅広い資料に接することによる「学習支援」、そして、図書館での業務体験を通して高い職業意識の育成や、サポートを受ける側からサポートをする側になることによる「キャリア形成支援」などを主な目的としている。

LiSA メンバーの募集は、本学の学部生を対象に半年間ごとに行っており、現在までの活動期間と参加人数は以下のとおりである。

表 1 LiSA の活動期間および参加人数

	活動期間	参加人数
第 1 期	2007.11.12~2008.3.14	13 名
第 2 期	2008.4.21~2008.10.3	10 名 (うち、継続 6 名)
第 3 期	2008.11.4~2009.3.13	13 名 (うち、継続 5 名)
第 4 期	2009.4.20~2009.9.30	20 名 (うち、継続 8 名)

ほぼ毎回、文教育学部、理学部、生活科学部の全学部全学年から希望者があり、2期以上継続して参加している学生もいる。回を重ねるうちに、既に参加している友人の体験談を聞いたことをきっかけとして参加する学生も出てきた。

2.2 募集・選考

募集の方法は、附属図書館の HP、附属図書館入口の電子掲示板、ポスターのほか、第 4 期の募集時には入学式直後の新入生オリエンテーションや図書館ツアーなどでも LiSA プログラムを紹介し、参加

募集を広報した。入学間もない 1 年生からも 3 名の参加があったことから、広報の効果があったと考えている。

応募書類に応募動機を明記して申し込んでもらい、チームリーダー(課長職)との面談を経て選考している。採用者間に学部や学年、経験回数の偏りがないようにと考えていたが、これまでの応募者は自然にうまく分散している。また、各期とも募集人数は 10 名であったが募集人数を上回る希望が寄せられ、意欲ある学生ばかりであったこともあり、実際には、これまで応募した学生全員を受け入れている。



図 2 第 4 期 LiSA メンバー募集のポスター

また、この 2 年の間に学生の応募動機に変化が見られる。「図書館が好き」、「図書館の業務を体験できる機会は貴重」という動機は全期を通じて見られるが、第 4 期になって「図書館のひっそりした中にも活気がある独特の雰囲気が好きだ」、「ブログを読んでいて我慢できなくなり応募しました」、「次々と学生の使いやすさを考えて進化していく図書館を勝手に自慢していたので、今度はその参加者になりたい。」という声がみられるようになってきた。

冒頭で述べた「イノベーション」を念頭においた本学図書館の各種の取り組みが学生に評価され、魅力的な場所として認識されつつあること、さらに活気ある場所に参加できるという期待感が LiSA への応募を後押ししていることが窺える。

2.3 受入体制

LiSA と職員との間の連絡調整や全体的な統括はチームリーダーが、そして、個別の業務に関するマ

ニユアル作成や当日の指示、サポートなどは当該の業務担当係が行っている。

本学図書館の職員は、大学組織上、図書・情報チームに属している。チームリーダーのもと、図書館業務の担当は、総務係、企画・契約係（主に雑誌を担当）、資料管理係（主に目録を担当）、情報サービス係（主に利用者サービスを担当）の4係であり、16名の担当職員中、チームリーダーを含めて半数が常勤職員、残りの半数は非常勤職員である。このように小規模な図書館であるが、LiSAの業務が図書館業務を担当する全係にまたがっており、チーム全体でLiSAプログラムの実施にあたることで、チームのメンバーとほぼ同数のLiSAの受け入れを可能としている。

2.4 実施内容

LiSAプログラムの開始にあたり、顔合わせミーティングを実施し、LiSAと職員双方の自己紹介やLiSAに行ってもらいたい業務の説明などを行っている。このミーティングの目的は、学生の緊張をほぐし、一緒にやっていくという実感を持ってもらうことである。そのため、楽しい雰囲気を作ることを大切に考えている。



図3 顔合わせミーティング風景

顔合わせミーティングやブログなどで提示された業務をLiSAが自ら選択し、実施期間終了までに計50時間となるよう各自でスケジュール調整を行う。そして、月ごとに業務実施計画を提出することを各学生に求めている。学生自らが時間や業務を組み立てることで、授業や実習などの合間に参加できるよう配慮するとともに、自主的な活動となるよう促している。

LiSAのスケジュールはグループウェアソフトでチームのメンバー全員が共有し、それぞれの担当係で事前準備を行っている。期間終了後にはLiSA各

自が実施報告書を提出し、業務の総括を行う。この実施報告書は、職員全員が目を通し、LiSAプログラムを通じて各学生が得たことを共有している。率直な意見が綴られているこの報告書は、図書館サービスの改善すべき点について示唆してくれるという意味でも大変意義のあるものとなっている。

これらの全過程を終了後、学長名と図書館長名の参加証明書を各学生に交付している。なおLiSAには、業務に対し実施責任をもってもらうことと、学生生活への支援として奨励金を支払っている。

3. 業務内容

これまでにLiSAに取り組んでもらった業務内容は以下のとおりである。

I. 雑誌に関する仕事

1. 紀要再配架に関する業務
2. 寄贈雑誌に関する業務

II. 図書に関する仕事

1. 教員著作コーナーの資料に関する業務
2. 図書の請求記号データの入力
3. 学科図書の蔵書点検およびIDラベル貼付
4. 寄贈図書の入力
5. 図書の受入業務
6. 図書の除却作業
7. 絵本の目録作業
8. 和装本の書誌事項調査

III. カウンター関係の仕事

1. 図書装備
2. 書架整理
3. カウンター業務

IV. その他

1. 機関リポジトリに関する業務
2. 資料再配架に伴う業務
3. 蔵書点検
4. キャリアカフェ文庫の選書

業務内容の設定に際し、なるべく資料に触れられる業務、幅広い分野の業務を設定するとともに、継続メンバーも新たな経験ができるよう新しい業務の割り当てに配慮している。その結果、これまでLiSAに取り組んでもらった業務は、カウンター業務や学科図書の蔵書点検およびIDラベル貼付など第1期から第4期まで継続しているものもあるが、資料再配架に伴う業務など、ある時期に特別に発生したものも多い。また、附属図書館ではなく、学科図書室で行う業務も含まれている。

業務の選択は、本人の意思に委ねているが、緊急性のある業務については、本人の承認を得て、業務

内容を変更することもあった。業務選択の傾向として、幅広い業務を体験したいという学生が多いが、図書館の状況を観察し、返却図書の多い月曜朝一番の書架整理を申告する学生や、急ぎの業務を手伝いたいという学生もあり、いずれのケースでも図書館の仕事全般に関心を持ち、意欲的に取組む姿勢が心強い。

また、LiSA の活動の中には、各係から依頼する業務のほかに、LiSA 自身の声から始まった活動や業務もあるので、それを3点紹介しておきたい。

1 点目は「キャリアカフェでのイベントの企画・実行」である。附属図書館には、平成 19 年度に採択された「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代 GP)、情報基盤センター、附属図書館の3者協働による「キャリアカフェ」が設置されている。このスペースでは、学生企画による様々なイベントが行われている。図書館への就職を志望している LiSA が、国立国会図書館と大学図書館の職員を招いて話を聞く「国会図書館ってなんぞや?」「大学図書館職員を囲んじゃえ!」というイベントをそれぞれ企画し、2009 年 1 月にキャリアカフェで開催した。

2 点目は、「ポップの作成」である。キャリアカフェには、学生がキャリアについて考えたり、リラックスしたひとときを過ごせるよう選書したキャリアカフェ文庫を設置している。第3期から、各 LiSA メンバーに3冊ずつ、ほかの学生にも勧めたい本を選書してもらい、「LiSA セレクション」としてキャリアカフェ文庫に並べている。自ら選んだ本をほかの学生にも手にとってもらいたいと、複数の学生が自発的にポップを作成した。この「LiSA セレクション」はキャリアカフェ文庫の中でも特に人気を集めている。



図4 キャリアカフェ文庫の LiSA セレクション

3 点目は「LiSA ミーティング」である。このミーティングは LiSA からの提案で始まり、第1期から

継続して開催している。LiSA ミーティングには LiSA のみが集まり、職員は参加しない。日程を決めるのも LiSA たち自身である。LiSA ミーティングの内容は LiSA 活動日誌ブログでも報告されるが、業務の感想にとどまらず、利用者としての図書館に対する希望や、図書館のスタッフとしての考えなども話し合っているようである。

4. 互いのコミュニケーションを深める試み

前出の「LiSA ミーティング」以外にも LiSA 同士、LiSA と職員が気軽に情報交換し、コミュニケーションを深める試みがあるので紹介したい。

4.1 「タトルの時間」

LiSA の活動は、各自がそれぞれ空き時間に個別に作業に当たるため、LiSA 同士で情報交換する場が少なく残念という「業務報告書」の感想を受け「タトルの時間」が設けられた。これは、同じ場所に集って手を動かしながら情報交換も楽しむ「ニットカフェ」や「キルトの会」からヒントを得たサービス業務担当者が、好きな時間に参加して楽しみながら作業を進められればと企画・実行した。タトルテープの挿入が必要な資料をたくさん用意し、LiSA 活動の申告が集中している時間帯を「タトルの時間」として設定した。LiSA 全員に告知し開催したところ、当初活動を予定していなかったメンバーや、LiSA の友人などが加わり、大変盛況な会となった。LiSA と職員が同じテーブルを囲み、手を動かすことでリラックスした雰囲気となり、会話が弾み打ち解けられるうえ、タトル挿入作業も捗り、大量の受け入れ資料が速やかに配架できる。受入資料が集中し、装備業務が集中する時期に定期的に開催されている。

4.2 「お茶の水女子大学附属図書館 LiSA 活動日誌ブログ」

LiSA プログラム開始にあたり、LiSA の活動を記録すること、LiSA のメンバーと職員のコミュニケーションを活性化することを目的として、2007 年 11 月の LiSA プログラムの開始とともに、ブログ(<http://ochadailisa.blog32.fc2.com/>)を開設した。複数の人による書き込みが簡単で、導入経費もかからないツールということでブログという形を選択した。現在このブログは、LiSA と職員双方から、気楽に記事・コメントの書き込みがされる場となり、活発な更新がなされている。

投稿の内容は、職員から LiSA に依頼したい仕事の紹介や成果報告、LiSA からの作業内容や参加したチーム内研修会に対する率直な感想などのほか、

LiSA プログラムに限定しない図書館活動全般に関する記録の場となっている。ブログを開設している図書館や図書館職員の方は少なくないが、「LiSA 活動日誌ブログ」は、図書館の公式ブログとして設置されていること、執筆者の多さ（ほぼすべての職員と学生によって行われている）、図書館活動全般の記録の場であるという点で、特色あるものとなっている。

その結果、「図書館の最近の動向や、図書館職員の方の仕事に対する姿勢、考え方が載っていてとても興味深かった。」「学外の方がお茶大の図書館をほめている記事を読むと、ほんの手伝いの立場であるがそんな図書館に少しだけ自分が関わっているのだと思ううれしくなった。」といった LiSA の感想が寄せられている。このブログは、LiSA が図書館と職員を理解する助けとなるとともに、彼女たちの目線や取り組みがいかに図書館の支えとなっているかを率直に伝える手段となっているといえるだろう。また、このブログには、本学の学生、他部署の職員、教員、他大学の図書館関係者からコメントが寄せられることもあり、本学図書館に関心をもってもらうことにも一役買っている。

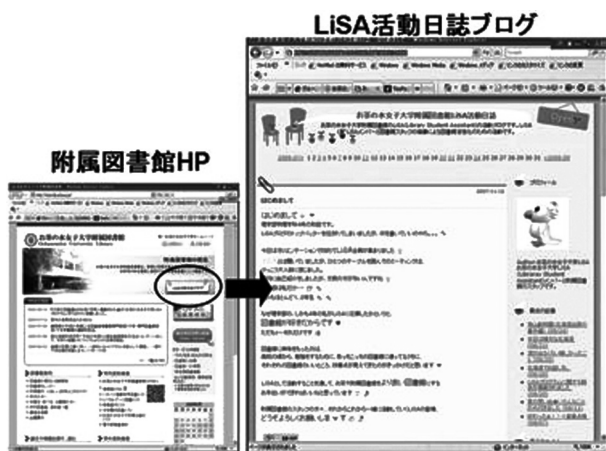


図5 お茶の水女子大学附属図書館 LiSA 活動日誌

5. 学生にとっての LiSA の効果

学生にとって LiSA プログラムへの参加がもたらした効果に関して、LiSA プログラムを終えた学生の成果報告書からいくつか紹介したい。

「私が読んできたのは、限られた分野で、それ以外にもとても多くの面白い本があると、改めて知ることが出来たのは、自分の知識や教養を広げるきっかけになったと思います。」同様の感想がほかにも多数寄せられており、LiSA プログラム導入の目的の一つである「幅広い資料に接することによる〈学習支援〉」について一定の効果があったといえるだろう。

また、「職員の方たちが仕事をしている姿を目にしながら一緒に作業することができます。それによって職場の雰囲気を少しでも掴めるので、今はまだ、漠然とした就職ということに対しても、具体的なイメージをもつことができました。」「LiSA の仕事を通じて、お互いの業務について知ることによって情報を共有し、自身のお仕事にも反映したいという職員の方々の希望を汲み取り、風通しがよく仕事のしやすい組織を作るといふ、組織のリーダーとしての仕事についても興味を持つようになりました。」「今期で学んだ〈引っ張るだけじゃないリーダー〉を私も色々な場面で心に留めて実践していきたいと考えています。」といった声からは、組織の一員として働く経験によって、働くということやリーダー像について具体的に思い描くに至ったことが窺える。

大学における学生のキャリア形成支援については、「2006 年度の文部科学省の〈現代的教育ニーズ取組支援プログラム〉（現代 GP）で〈実践的総合キャリア教育の推進〉が6つの募集テーマの1つにとりあげられ、176 件の申請件数のうち 33 件が採択され、続く 2007 年度にも〈実践的総合キャリア教育の推進〉には 153 件の申請があり 30 件が採択されるなど、文部科学省の政策的要請にこたえ競争的資金を獲得し、安定的な経営を続けていくためにも大学としていかに取り組むかを意識せざるをえない状況となっていった。」という指摘³⁾にあるように各大学で様々な取組みがなされているが、大学図書館を活用した本学のような例はまだあまりないようである。

また、経済産業省は、2006 年 2 月 8 日に「社会人基礎力に関する研究会」の「中間とりまとめ」⁴⁾で大学時代に学生が身に付けておいて欲しい力として「社会人基礎力」を

- ・「前に踏み出す力」（アクション）～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～
- ・「考え抜く力」（シンキング）～疑問を持ち、考え抜く力～
- ・「チームで働く力」（チームワーク）～多様な人とともに、目標に向けて協力する力～

と定義している。そのうえで「社会人基礎力」は「基礎学力」「専門知識」「人間性、基本的な生活習慣」と重なりあう部分があるものであり、相互に作用しあいながら、様々な体験等を通じてスパイラル的に成長していくものととらえ、大学に対しても、意識的にそれらを育成するように求めており、若者の「気付き」や「成長」につながるインターンシップやキャリア教育の推進を促している。

LiSA プログラムはこのような動きに沿った取り組みであり、これまで図書館で実施してきた学生支

援とは異なるが、図書館の存在と活動が学生に対して、広い意味で教育の場になりえることを示している。

6. 図書館、職員にとっての LiSA の効果

6.1 説明スキルの向上

LiSA のメンバーに対し、業務説明を行うことによって、職員ひとりひとりにとってこれまでとは比較にならないほど他者に説明するという機会が増えた。業務を行う際、それがどんな意味を持つのかを理解することは、モチベーション向上や留意すべきポイントの明確化に欠かせない。そのため、業務説明を行うときには、やり方だけを説明するのではなく、その業務の最終的な目標や、目標に至るまでのどの過程にあたるのか、といったことも説明するよう心がけている。

その結果、LiSA プログラムに携わることが、職員が自分の仕事について客観視し、他者にわかりやすく説明するためのスキルアップの機会となっている。

6.2 職員の負担軽減

LiSA のメンバーに図書の装備や配架などのルーティンワークを依頼することによって、職員の労力をほかの業務に振り分け、ルーティンワーク以外の課題に新たに取り組むことが可能となっている。本誌 83 号²⁾で報告させていただいたような様々な取り組みを同時進行で実施できたのも、LiSA のサポートに負うところが大きい。

また、LiSA の協力により、蔵書点検など人手が必要な業務を速やかに完了できたケースも多い。本学図書館では、毎年夏季休業期間中に開架閲覧スペースを 4 日間閉室し、蔵書点検を行っている。2009 年 8 月の蔵書点検では、同年 3 月に新たに 1 階オープン書庫を設け、約 5 万 8 千冊を開架にしたことにより、点検対象冊数が合計約 17 万 9 千冊と増加した。当初、閉室期間中の作業完了が危惧されたが、4 日間にのべ 35 名の LiSA が、総時間数にして 150 時間参加してくれたことにより、バーコードの読み込み作業のみならず、例年は閉室期間が終了した後も作業が続いていたラベル貼り、配架、修理などの作業も、4 日間の閉室期間のうちに終えることができた。

6.3 学生の目線を得る

業務中の会話や、実施報告書やブログなどを通じ、図書館に対する学生ならではの視点からの率直な意見や質問、感想を聞くことができるという点でも、

LiSA は図書館にとって貴重な存在である。図書館改修で事務室をオープンなスペースとし、サービス業務担当者のみならず全職員が日々学生の姿を目にできるようになり、さらに LiSA プログラムの開始によって全職員が学生の生の声を聞けるようになった。たとえば情報探索講習会の構成やラーニングコモンズの椅子の選定について意見を聞くというように、様々な場面で気軽に図書館のサービス対象者である学生の声を聞くことが可能となった。冒頭で述べた「利用者本位のイノベーション」を生み出すため、職員がサービス対象者である学生の立場に立つうえでも、学生の目線を与えてくれる LiSA は心強いサポーターであるといえる。

7. 最後に

LiSA からの「これからの LiSA の活動に取り入れられればいいなと思ったのが、“図書館のよさを学生の皆さんにもっともっと知ってもらおう”お仕事です。」「利用者でありかつ運営のお手伝いをさせて頂く LiSA がさらなる勉強を重ね、学生と図書館側の媒介者として友人との口コミ以外に出来ることがないか思案している。」といった声から、自らを図書館と学生を結ぶ存在と位置づけ、意欲的に図書館活性化のために力を尽くしたいと考えていることがわかる。

また、この LiSA プログラムは、本学の学生企画プロジェクトチームが作成する学生新聞「お茶娘タイムズ」から取材申込を受け、紹介された⁵⁾。記事は「今度から、図書館を利用する時には、陰で支える学生たちの存在を思い出し、感謝の気持ちを持って使っていきたいと思う。」という言葉で結ばれており、LiSA 以外の学生にとって、LiSA の存在が図書館に関心を寄せる契機となる可能性を示唆している。

LiSA プログラムが誕生したそもそものきっかけは、2006 年度の新入生オリエンテーションにおける図書館長の言葉だった。当時図書館長だった羽入佐和子先生（現在、お茶の水女子大学長）がおっしゃった「新入生のみなさんには、図書館のサポーターになっていただきたい。」という言葉を受け、図書館のファンではなく図書館のサポーターを作るために図書館は何をしたらよいのか、という問題意識によって生まれたのが LiSA プログラムであった。学生の意識にとっても図書館側にとっても、まさに LiSA が図書館のサポーターとなっている。

「なぜ LiSA プログラムが、図書館にとって業務負担とならず、LiSA と図書館双方にとって効果のある取り組みとなっているのか。」最後にその問い

に対する回答として第1期からLiSAを継続している学生の言葉を紹介したい。「LiSAの活動は外側から見ると図書館の業務を補助しているというだけに見えるのかもしれませんが。しかしLiSAの目的が〈学生の自主性、自立性を重んじた学習・教育支援〉とされている通り、私たち一人一人が自由にLiSA業務に対する視点を見つけて活動に取り組むことで、各々が自分にとって必要な学びや気づきを見つけることができる場なのだと改めて思いました。また、そこが私にとってのLiSAの面白いところでもあります。」この言葉から「図書館と学生の協働」を行う際、その活動が学生にとって自主的、自立的に取り組めるものであることが重要なことがわかる。

LiSAプログラムは、職員にとってもはじめての体験である。LiSAの声を反映し、またLiSAの自発的な活動をサポートすることで、LiSAプログラムは成長を続けている。今後もこのプログラムを継続し、LiSAが活躍できるシチュエーションと図書館のサポーターを増やし、図書館を活性化し、よりよいサービスとして還元できるように努めていきたい。

注記・引用文献

- 1) 堀井秀之. 経済教室. 日本経済新聞. 2009年8月18日, 27面.
- 2) 餌取直子, 茂出木理子. お茶の水女子大学附属図書館における学習・教育支援サービスのチャレンジ: 図書館の学習・教育支援サービスに限界はない. 大学図書館研究. 2008, no.83, p.11-18.
- 3) 上西充子. 大学のキャリア支援: 実践事例と省察. 産労総合研究所出版部経営書院. 2007. 234p. (キャリア形成叢書).
- 4) 経済産業省社会人基礎力に関する研究会.
“中間とりまとめ”. (オンライン), <http://www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoryoku-honbun-set.pdf>, (参照2009-8-24).
- 5) お茶娘タイムズ. [2008], no.2, p.3.

参考文献

- 1) 胡内奈都子, 茂出木理子. お茶の水女子大学LiSAプログラム. 大学の図書館. 2009, Vol.28, no.7, p.128-131.
- 2) 茂出木理子. ここから拓いた! お茶大図書館活性化のための5つの作戦: 平成19年度第2回東海地区大学図書館協議会研修会公演要旨. 東海地区大学図書館協議会誌. no.53, p.30-38.
- 3) 小林一章. マイライフ・マイライブラリー: 東京女子大学. IDE. 2009, no.510, p.32-36.
- 4) 学生協働事業: 学生からの寄稿. 山口大学図書館報. 2009, no.79, p.5-6. (オンライン), <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/lib-nws/79/79.pdf>, (参照2009-8-24).
- 5) 佐藤尚之. 明日の広告: 変化した消費者とコミュニケーションする方法. アスキー, 2008, 237p. (アスキー新書, 045).
- 6) 上田信行. プレイフル・シンキング: 仕事を楽しくする思考法. 宣伝会議, 2009, 189p.
- 7) Dan Saffer. 吉岡いずみ訳. インタラクシオンデザインの教科書. 毎日コミュニケーションズ, 2008, 255p.
- 8) 谷内篤博. 大学生の職業意識とキャリア教育. 勁草書房. 2005. 182p.
- 9) 文部科学省. キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書: 児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために. (オンライン), http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/06122006.htm, (参照2009-8-24).
- 10) 国立大学協会. 大学におけるキャリア教育のあり方: キャリア教育科目を中心に. (オンライン), <http://www.janu.jp/active/txt6-2/ki0512.pdf>, (参照2009-8-24).

< 2009.8.28 受理 ひろた みき お茶の水女子大学
図書・情報チーム企画・契約係, もでき りこ お茶
の水女子大学図書・情報チームリーダー >

HIROTA Miki, MODEKI Riko

What Cooperation between Academic Libraries and Students Can Do : LiSA Program at Ochanomizu University Library

Abstract : In November 2007, Ochanomizu University Library began a program called “LiSA : Library Student Assistant Program”. Its aim was to revitalize the library by having students and library staff work together under the framework of “Innovation of Library Services and Operations.” The LiSA program was established to provide learning and teaching support services to students : it provides learning support by introducing students to a wide range of materials, is also effective for career development guidance by providing work experience, and has a further benefit of developing a group of strong library supporters. This paper reports on the development of the LiSA Program and shares a number of concrete episodes.

Keywords : Ochanomizu University / learning and teaching support services / student assistants / library revitalization / career development services / Library Student Assistant (LiSA) / library supporters